

「知音」

法学部 教授 林 秀光

夕暮れにうかぶ稜線
隔てたる遠くはなれた
まちの喧騒

ある日、目の前に広がっていた箱根の山々が、この一首を授けてくれました。当時、私の心は日吉にありました。子育てが一段落し、三峽ダムの研究に本腰を入れようとしていた時期でしたが、内に抱えていた焦燥感を率直に言葉にした歌だったように思います。十年余り、孤独な執筆の日々のなかで、折々の思いを三十一文字に託してきました。そうして、思いの居場所をつくってきたのだと、今は思っています。著作を刊行したあと、研究を仕上げた達成感とは裏腹に、「まちの喧騒」がさらに遠のき、孤立感が深まったこともありました。そんな折、卒業を迎える4年生の寄せ書きにつづられた言葉が、私の心の琴線に触れました。

『知音』は、夏合宿で教わった大切な言葉です。その由来を知り、さらに心に残りました。故郷を離れ、ひとり机に向かい、長く研究を続けてこられた先生の言葉だからこそ、胸に響きます。この時代に、この学び舎で先生に出会えたことに感謝しています」

「知音」という言葉の背景には、古くから語り継がれてきた物語があります。中国春秋時代の琴の名人・伯牙が、親友であった鍾子期の死を嘆き、「もはや自分の音を解する者はいない」と琴の糸を切った故事です。もとは「音律を解する力」を意味していましたが、この逸話により今日では「知己」を指す言葉として用いられるようになりました。

こうした学生たちとのやり取りを通して、私は、知らぬ間に日吉と三田で多くの「知音」に囲まれていたのだと気づかされました。「三峽ダムとは何か」という問いを誰かに届けた一心で重ねた思索の日々も、今ではかけがえのない時間だったと思います。塾生も、この春巣立ち塾員となった皆さんも、それぞれの場で誰かの「音」に耳を澄まし、自らの「音」を奏でる喜びを知り、やがて心の通じ合う「知音」に出会えることを願っています。



執筆を支え、共感を呼んだ静かな佇まい
橋本関雪・画

談話室

教員によるエッセイコーナー